

No. 55

September.  
20232016年  
朝日がん大賞  
受賞2005年  
保健文化賞  
受賞

## NEWSLETTER

## 第32回学術集会のご報告

SAITO Hiroshi

齋藤 博

青森県立中央病院



2023(令和5)年6月8日から6月10日の日程で日本がん登録協議会第32回学術集会を青森市で開催いたしました。200名を超える多くの皆様にご参加いただき、無事、盛会裡に学術集会を行うことができましたことをご報告するとともに、心から御礼申し上げます。

今回の学術集会のテーマは「国際標準のがん登録を目指して」としました。日本では地域がん登録の時代からIACRやSEERの登録項目、定義を取り入れ、常に国際的な視野からの登録が進められてきたと聞いております。2016年からは全国がん登録が開始され、その後、全国がん登録としては初めてIACR「5大陸のがん罹患(Cancer Incidence in 5 continents, CI5) Vol. XII」の編集や、ロンドン大学が主導するCONCORD-4 studyのデータ募集に臨む状況になっています。そのような状況の中、私自身はかつて青森県の地域がん登録の立ち上げに関与したものの、がん登録については一利用者にとどまり、登録の国際化とは無縁でした。ただ、大腸がん検診や乳がん検診の国際組織のメンバーとして早くから海外のがん登録事情に接する機会があり、我が国でも国際標準の登録体制が必要と認識していました。第32回学術集会長にご推挙いただき、今回の学術集会のテーマ「国際標準」を掲げた次第です。

またその一方で、がん登録推進法が施行後、国際共同データ利用への参画はこれが初めての機会ということもあり、海外へのデータ移送に関してはかなり高いハードルがあることも知りました。そこで今回の学術集会では国際共同データ利用・研究の重要性を訴えるとともに、海外では標準的となっているデータの国内での実現、そのような利用に十分に対応できる精度の高いデータを蓄積するための登録実務などについて議論していただきたく、弘前大学、松坂方士先生の主導でプログラムを編成しました。なお、がん検診の精度管理を国際水準に高めるための必須の課題である「がん検診データのがん登録との照合」を本学術集会では初めて取り上げることができました。これはがん登録のがん検診における意義とその活用方法を知って戴く絶好の機会となり、がん検診を担当する立場からは将来に向けて大きな第一歩になったものと喜んでおります。

集会本番ではシンポジウム等、すべてのセッションにおいて充実した議論が活発に展開されました。それらの模様については各座長の先生方より紹介されるものと思いますのでここでは

以下に、学術集会会長講演と情報交換会について簡単にご報告いたします。

6月9日の会長講演では大腸がん検診のこれまでの歴史を振り返りました。現在、世界の先進国で行われている免疫法便潜血検査(FIT)を用いた大腸がん検診のルーツは日本、それも当地、青森県であることがこのテーマとした第一の理由です。また、今後、我が国のがん検診は国際的な原則に即したあり方へ転換していく必要がありますが、科学的根拠のないがん検診が依然として多く行われており、がん検診の成果があがらない要因です。そのような中、大腸がん検診はわが国のがん検診では唯一その政策導入の前から死亡率を指標とした有効性評価研究やがん登録との照合による感度・特異度の評価等の取り組みも行われていました。国際標準のがん検診を標榜していく上で、このような大腸がん検診の歴史を参照・共有することは意義があるだろうと考えたのが、このテーマとしたもう一つの理由です。

今回の学術集会は4年ぶりの対面での開催でもあり、9日夜開催の情報交換会は大盛況で旧交を温めていただけたことと思います。青森を味わっていただくというコンセプトで企画を温めていました。余興は10代から津軽三味線奏者として才覚を現し、その後は尺八などにも芸域を広げた山上進さんの演奏をお聴きいただきました。青森出身の天才ミュージシャン、矢野顕子のアルバム録音にも10代で参加しています。また、陸奥湾産のヒラメをはじめ、青森の海産物も味わっていただきました。当日召し上がっていただいた魚はほぼすべて青森県産でした。お酒は田酒や豊盃をはじめとした青森県の日本酒(限定品大吟醸)で、ワインは県産でカバーできませんでしたが、すべて私のチョイスです。お開きまでの2時間の間に海産物も日本酒、ワインも全て召し上がって戴き、大変うれしく思っております。

懇親会の最後には国立がん研究センター・がん登録センター長の井上真奈美先生からご挨拶をいただきました。今後の日本のがん登録のさらなる発展のために、国立がん研究センターとJACRが手を携えて取り組んでいくことを期待いたします。

COVID-19のパンデミックの嵐もどうやらその勢いを失いつつあり、社会も再び動き出しています。公衆衛生分野でも、生活習慣病対策やがん対策の原状への回帰が着々と進行しています。今回の学術集会が新しい時代のがん登録、がん対策へのスタートになってくれることを祈念してやみません。